

## びほろのことはあそび サマイクルのイム

-コンル カ タ-



### ◆ ウチャラパクテというジャンル

ウチャラパクテ（北海道西部でいうウパラパクテ）は「互いに口を競う」という意味で、「言葉あそび」や「早口言葉」、「口くらべ」などとも言われる。その内容は多岐に亘るが、本作品は問答形式となっているのが一つの特徴である。

この種の「言葉あそび」は胆振や日高地方などにも伝承されていて、早口に間違いなく言うことが上手な言い方とされている（萱野茂（編著）『萱野茂のアイヌ神話集成 第10巻』1998 CDつきほか）。

なお、知里真志保氏の筆録ノートに、本作より長めの「サマイクルのイム」が記録されているが、そこでは、サマイクルが弓に弦を張っていて、その弦が切れた拍子に思わず発したイムとされている。

### ◆ 本作品の原資料について

美幌出身の菊池クラ氏伝承の「言葉あそび」である。

原資料は、NHKによって収録され、知里真志保氏が監修をつとめた『アイヌの歌謡』の中に収められており（日本放送協会放送文化研究所・日本コロムビア『アイヌ歌謡集 第8集』）、収録年は1948年である。なお、タイトルについてはアニメ化にあたり編集委員が便宜的につけたものである。

本作に収録した録音は川上容子氏の口演による。

### ◆ アニメ化にあたって

原資料は女性一人による口演であるが、この手の「早口言葉」は男女関係なく演じられることが多い。内容的にはかけ合いで構成されているものを、一人で演じきる。本作品ではこのかけ合いを、二人の男性によるものという設定で描き、冒頭から全画面で展開する絵を最後には会話の吹き出し部分に入れ込むことで、そのことを示した。

また、本作には「高速篇」と「ゆっくり篇」があり、前者は原資料と同じ内容・速度とし、後者は、アイヌ語をリズムよく覚えられるように意図したためのもので、演出の仕方が多少異なっている。

登場する人物はアイヌの男女を親しみの湧くデザインでキャラクター化したものであり、衣装や模様等は簡略化している。木を切る場面に描かれた陣羽織（袖なしの表衣）や被り物は祈りの時などに身に付ける正装である。また、氷が張る季節にブドウツル皮の草履を履くなど実際の生活とは合わない点もあるが、本作品を取り上げる意図はそうした細部を描くところにあるのではないことをご了承いただければ幸いである。

それから、最後のイバカリッ（化け物）が具体的にどのようなものかは原文には語られていない。ここでは「人を化かす」という属性をわかりやすく表現するため「女性に化けておびき寄せる」という演出を加えた。

しらぬかのうた  
口輪を鳴らして  
-オタコチャンチャン-



### ◆ ヤイサマというジャンル

アイヌの歌謡のなかで、その時の自分の気持ちを即興的に歌ったもので、即興歌、叙情歌などと訳される。

メロディは歌（歌詞）ごとに異なるのではなく、一人ひとりが自分の節回しを持っており、どんな内容でもそれに乗せて歌う。また、「ヤイサマネナ」などはやし言葉を織りこみながら歌われる。ヤイは「自分」、サマは「そば」のことで、ヤイサマは「自分自身」という意味。即興的に歌われるものなので、皆で歌うのではなく、一人で口にして楽しむものだとも言われる。だが、他人の歌でも好まれば何度も歌われ、伝承されることもある。地域によって、ヤイサマ（沙流、千歳、帯広など）、ヤイサマネナ（旭川など）、ヤイサマなどと呼ばれる。即興歌のなかでも、とくに恋の歌はヤイカテカラ、嘆きの歌はイヨハイオチシと呼ばれる。

### ◆ 本作品の原資料について

白糠出身の四宅ヤエ氏（1904–1980）伝承のヤイサマである。富水慶一氏によって1968年に採録され、『富水慶一採録 四宅ヤエの伝承 歌謡・散文編』（2007 CDつき）に収録されている。

本作での録音は山本りえ氏の口演による。

### ◆ アニメ化にあたって

本作はヤイサマ（叙情歌）であるため、主人公の気持ちを描くことに重きを置いた。歌の中でくり返される「オタコチャンチャン」「チャコチャンチャン」は、手綱を引くたびに馬の口輪（手綱をつけるため、馬の口にかませる金具）が浜に響く音だが、同時に、主人公の少女の気持ちの高まりを表現していると解釈し、少女の心理と馬の動作が同調しているように演出した。

また、馬が出てくることから、本作が歌われはじめたのは明治期以降と考えられる。主人公の少女はアイヌであるが、アイヌの伝統的な装いではなく和服を身につけている。これは、当時の実際の服装を反映させたためである。

## びらとりのおはなし オキクルミの妹

-オキクルミ コツ トウレシ-



### ◆ カムイユカラというジャンル

アイヌ民族の物語文芸の一つ。

主にカムイ（神様。アイヌは動物や植物、自然、天候、道具など、生活にとって欠かせないものや、アイヌの力では到底及ばないほど強いもの）のことを「カムイ」と呼んで敬っていたが主人公となって、自らの体験を語る内容のものが多い。このカムイユカラという呼び方は主に北海道の胆振や日高西部などのもので、その他の地域ではオイナ（北海道東北部）、トゥイタケ（日高東部）と呼ばれている。主に女性が語るため、「女のユカラ」という意味のメノコユカラ、マツユカラと呼ぶ地域もある。

韻文形式で語られる物語で、短いメロディーにのせて、サケヘ（あるいはサハ）とよばれる繰り返しの文句を語りの合い間に入れながら語る。

サケヘは、物語の主人公となるカムイたちの鳴き声や姿、性質や特徴などに由来しているのではないかと考えられているが、意味がよく分からないものも多い。

### ◆ 本作品の原資料について

平取出身の鍋沢元蔵（アイヌ名モトアンレツ）氏（1886-1967）伝承のカムイユカラである。1959年に近藤鏡二郎氏が採録した。

なお、鍋沢氏は1962年のNHKの調査に際しても同じカムイユカラを語っているが、本作とは異なった人称を用いており、興味深い資料である。本作の類話は、金田一京助『アイヌの神典』（1924）や、後述の著作などに複数見ることができる。本作での録音は荒田このみ氏の口演による。

### ◆ アニメ化にあたって

本作はオキクルミとその妹のきょうだいの物語として描いているが、アイヌの物語では、親しみや尊敬の気持ちから自分の夫を兄、妻を妹と表現することがある。この物語の場合もきょうだいではなく夫婦の物語であることが考えられるが、今回は、萱野茂（編著）『萱野茂のアイヌ神話集成 第1巻』（1998 CDつき）や久保寺逸彦（編著）『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』（1977）に収録されている類話を参考にしながら、兄と妹の物語としてアニメ化した。

沙流川を離れアイヌの村を恋しがるあまり、食事を取る気力もなくなった妹に、オキクルミが囲炉裏の灰に沙流川の風景を描いてみせる。そこに描かれている風景は、木々が生き茂る清流のほとり、人々が山菜を採り、魚を獲り、あるいはシカをとる豊かで平穏な暮らしである。

本作では、川漁やシカ猟のほかにも、オオウバユリ掘りの様子や、クワエチャッセ（狩猟に携行する杖を使って斜面をすべりおろること）も描き加えたほか、沙流川流域の風景として、オキクルミの伝説が伝わるオプシヌプリ（穴あき山）を描いた。四季折々の生業と、沙流川の景観・伝説を知る教材としても役立てられるように意図した。

## からふとのおはなし 空き家の化け物

-オハチスイエ-



### ◆ ウチャシコマというジャンル

ウチャシコマは、アイヌ民族の物語文学の1つで、散文形式で語られる伝説を指す。ほかに散文形式のものとしてはトウイタハ「昔話」があり、こちらは作中に短い歌謡が挿入されることが多い。

韻文の文学が常人離れした能力・霊力を持つ人間や半神半人の英雄、神々を中心に展開するのに対し、散文文学に登場するのは（霊能力を持っていたとしても）もう少し普通の人々であることが多い。本作でも、トウスクッ（シャマン）が活躍しているが、事件を直接解決したのはトウスクッに憑いている守り神の力である。

### ◆ 本作品の原資料について

本作は、空き家に棲みつくオハチスイエという強力な魔物を退治するストーリーで、原資料は樺太（サハリン）東海岸に伝承されていたもの。

1903年にイボホニ氏という男性が語ったものを、ポーランド出身の民族学者B.ピウスツキ氏が書き取り、1912年に出版された『アイヌの言語・民話の研究資料』に原文と訳が収録された。日本語の資料としては、知里真志保氏による要約、藤村久和氏を中心とした北海道ウタリ協会札幌支部アイヌ語勉強会によるカタカナ転写の原文と訳、詳細な注解が出されている。

本作は文字資料に基づくため、語られ方は推測せざるを得ない。音声の収録にあたっては知里真志保氏監修・日本放送協会（編）『樺太アイヌの歌謡』（1951）に収められた樺太東海岸新聞の男性によるトウイタハの録音を参考にし、口演は椎名庵氏が行った。

### ◆ アニメ化にあたって

原資料では、直前に収録された話を受けた形で書き起こされているため、本作では一話完結となるよう冒頭を改変した。また、本文中の重複箇所を削除し、つながりの言葉や締めくくりの言葉を加えた。本作は散文説話というジャンルの性質上、そこに描かれる世界や人物は現実世界にごく近いと考えられる。そのため、人々の装い等は資料に即して描くことに努めた。ただし、夏の家の屋内の様子（特にゴザの敷き方など）、イヌぞりの構造など、なお不明な点が残ったところもある。

トウスには、トウス専用の太鼓や、独特の発声と節回しを持つ歌が伴う。歌については即興性が高く、声を揃えて歌うことは困難だと思われるが、太鼓のリズムについてはある程度共有されていた可能性が考えられる。本作では中心になってトウスを行うものが太鼓と歌を担い、他2名は「補助のために念を込めつつ太鼓を打つ」という演出にした。

オハチスイエのデザインについては創作的な部分が多いが、上記のピウスツキの著書には、オハチスイエの話が他に2篇収録されており、非常に鋭利な刀を持つ顔が見えないほど毛に覆われた化け物とする描写があるので、それを参考にした。化け物が自分にゴミをかける描写は、不浄なもので善神の力を弱める意図である。西海岸の別の説話にも、化け物が自分にゴミをふりかける場面があり、樺太においては化け物を描写するときの常套的な表現であった可能性がある。